

子どもと過ごして ——共に学び歩む

田 山 治 子



月日の経つのは早いもので、子どもたちと出会ってもうすぐ1年になります。子どもたちにとっては、初めての幼稚園であると同時に、今後避けて通れぬ集団生活、それも家族とは離れた生活が始まったわけです。一方、私も「先生」としては初めての幼稚園であり、社会人としての生活もここからスタートしたわけです。

ですから、新学期が始まった当初は、子どもも私も大変でした。母親と一緒にいたがる子ども、おうちに帰りたいと泣く子ども、つられて泣き、甘える子ども、それ

らの子どもたちに囲まれ、まごまごしている私……そんな状態も続きましたし、新米であるがゆえにしてしまった失敗もたくさんありました。しかし、そんな中にも私の小さな進歩を見つけ出して下さる先輩の先生方や、入園後の子どもの変化を喜び、報告して下さるお母様方や、そして何より子どもたちの純粋な目、心に救われ、励まされてここまで来ることができました。

それらをふりかえれば、書くことはたくさん出てくるのですが、ここでは子どもたちの様子を中心に、私が今まで感じてきたことを書いていこうと思います。

三歳の子どもたちと生活を共にして、まず感じたのは、ことばでは伝わらない部分が多いことでした。もちろん、子どもたちはまだ生まれて三年ちょっとで、これからいろいろな学んでいくのですから、語い数の違いなど明らかな理由もあります。けれども、徐々に心が通じ合ってきた過程をふりかえてみると、それだけではないように思えてくるのです。

先日、このようなことがありました。降園時刻になっ

たので、トイレへ行くように声をかけていたのですが、トイレをのぞくとまごまごしている女の子がいます。いつもと様子が違うので声をかけてみるとどうやら男子用トイレに興味を持ち、そちらでしてみたいらしいのです。私はどう答えようかと少し迷ったけれども、「どうかしらね、できるかしらね」と言ったまま、その場を立ち去りました。結局、その子は男子用トイレでし始め、途中でうまくいかないことに気づいたけれどももう遅く、パンツをぬらしてしまいました。この子はもう自分ではき替えられるのですが、その様子からは、ぬらしてしまったという罪悪感、後ろめたさは少しも見られず、むしろ何かをやりとげた時に得る自信さえ感じられるようでした。

毎日子どもたちと生活していると、この子に限らず、このように自分の力で試してみようとする場面によく出会います。子どもたちは「〇〇は△△するのですよ」「はい」とことばで、つまり頭のレベルで理解するのではなく、一つ一つを確かめながら実感の伴った形で、自

分の形に直して消化していくように思えます。自分の足で自分の世界を踏み固めていつているのですから、何事にも揺らぐことのないしっかりしたものとなることと思います。とてもエネルギーを使うことでしようけれど、人間は生まれながらにして、こんなパワーをもっているのですね。一方、大人である私は、そのパワーをいつのまにかどこかへ置き忘れてきてしまったようです。自分なりの裏づけをもつて、とり入れ、行動していることがどのくらいあるのだろう、大人に近づくにつれ、増えてくる情報を、他の人がやっているからという安易な理由で、鵜呑みにしたり、真似をして安心し、労力をかけずに済ましてしまっていることが多いのではないだろうか、と考えさせられました。

幼稚園は、子どもたちのこの素晴らしいパワーが十分に発揮できる場となるよう、できるだけ自分で試せる環境にしていかなければならないと強く思います。と共に、私の忘れていったパワーをとり戻す場にもなってほしいと思っています。

また、子どもたちのこのパワーは、時間を伴って初めて十分に発揮されることもあるようです。

あまりに寒かったので砂遊びの時、水は使わないことにし、蛇口をきつく閉めていたある冬の日のことです。水遊びの好きな一人の男の子が、一生懸命蛇口をひねろうとしていたので、「今日はね、とっても寒いからお水はお休みね。年中さんになった時のプールにおいておこうね。」と言いました。すると、ひねる手はとめないのですが、表情が険しくなりました。私は、その子の手を蛇口からはずしながら、更に説明を繰り返したところ、表情はもっと険しくなり、近くにあった大きな石の上でストンと座り込みました。私は、納得のいくようにしつつこく説明をしましたが、当の子どもは私をそして私のことばをも払いのけるようにして「もうほっといてよ。」と言うのです。私は離れた所で様子を窺うことにしました。

この子はこの時、どうやら自分の心の中で水を使いたいという個人的な気もちと、今日は使っちゃいけないん

だという集団の約束事との間で、折り合いをつけていたようです。ですから、とうとうと話す私の説明は、却って邪魔だったのでしょうか。顔にも気もちの激しい戦いぶりが現われていて、その様子はとてもいじらしく、つい手を貸したくなるのですけれど。

子どもたちも入園当初は、もう自分のしたいことが第一でしたが、友だちと一緒にいたり、何かすることの楽しさが少しずつわかってきた頃から、あちらこちらでその心の中の衝突に必死に立ち向かっている姿によく出会うようになりました。その様子は、子どもによって様々なのですが、どの子もいじらしくまた、急に大きく成長したようで、たくましくも感じられ、嬉しくなります。

更に、最近特に、遊びの中で生じたトラブルを子どもたちなりに懸命に考え、解決しようとする姿も見られるようになりました。

男の子も女の子もままごとで遊ぶのが好きなのですが、ある日二人の男の子が「お父さんになりたい」と言い争いを始めました。私は慌ててその場を鎮めようと、



▶フォークを使ってお医者さんごっこが始まる

お兄さんやお客さんなど、他の役を勧めたり、順番にすれば、と案を出すのですが、子どもたちの気もちは動きません。途方に暮れていた時、急に一方の男の子が、「じゃあさ、ぼくはこのお父さんだからね。△△ちゃんはそのうちのお父さんね。」と、意外な提案をしてくれました。相手はすんなり納得、以後仲良く遊んでいました。その後来た子どもたちも同じ方法で加わり、楽しそうに遊んでいました。

「場所によって分けたお父さん」、大人の私にとっては思いもよらぬことです。しかも、この「場所」とは、曖昧なもので、ままごとセットのない場所のお父さんも、別にそこで家を作るつもりはないようなのです。お父さんが複数存在できる理由が、当の子どもたちになれば、それでよいようなのです。実際ふと気がつくと、ままごとの棚のところ、二人のお父さんが仲良く料理を作っていたのですから。



▲パーティーの蝶々さんも参加。「パーティーだよ」と報告する子もいる

また11月には、毎年「お芋パーティー」という行事があります。これは年長組がお芋掘りです。てきたお芋を焼いて、園庭の「お芋レストラン」でみんなにごちそうするというものなのですが、お芋引き換え券は手作りで、当日も券売り場の係、案内係、コックさん、ウェイトレスさんを誇らしげに演じてくれます。特に、コックの長い帽子や、ウェイトレスの頭の飾りは人目を引くので、それをつけて堂々と仕事をしている様子は、三歳の子どもたちには、憧れの気もちと共に強く印象づけられたようです。三歳の園庭に戻って来た時の子どもたちは、手作りの券を片手に、ポーンと夢でも見ているような表情をしていました。何人かが、「コックさんになるの」「お芋レストランなの」と言い始め、砂遊びが始まりました。そのうち「あのコックさんの帽子が欲しい。作って。」と言いだす子が出てきました。作ろうと思えば作れないこともないけれど、やはり本物



▲お芋パーティー後の子どもたちの遊び

は年長になるまでお楽しみにとっておきたいなという気もちがあったので「そうねえ。」「またね。」と、迷いながらもその場凌ぎの答え方をしていました。しばらくして一人の子が、砂を運ぶのに使っていたバケツを頭にかぶって「コックさんだよ」と言ったのです。他の子どもたちも次々に真似をし、年長組の「お芋レストラン」のように落ち葉を集めてたき火にする子ども、石ころのお芋を集めて焼く子ども、できたお芋とサービスの飲み物を平均台のレストランへ届ける子どもなどが出てきて、多くの子どもたちが一緒に楽しく遊んでいました。

この頃、男の子たちと女の子たちがそれぞれ違う遊びをすることが多かったのですが、この共通の経験が、そして子どもから出た発想が、混ざって多くで遊ぶよいきっかけとなったようです。一方、子どもから出てきた「帽子を作りたい」という思いを叶えてあげなかったことが果たして良かったのかと気になります。

どうやら、大人の堅い頭で考えた方法では解決できなかったり、子どもにはしっくりいかないことも多くある

ようです。

このように毎日が、戸惑い、驚き、喜び、後悔の連続ですが、これ程までに心のメーターの針がピクピク動く生活は、子どもと共に生活しているからこそのもので、とても幸せなことだと思えます。と同時に、子どもたちに感謝する気もちでいっぱいです。

今後いろいろな場面に出会うでしょうが、子どもから出てきたアイデアと共に今の私にできる子どもにとって最も良い方法を模索していきたいと思えます。

(洗足幼稚園)